

計画（予定）を超えて：故郷の島へ帰る

K-アンドレア・エヴァローズ・リモル

こんにちは、私は K-アンドレア・エヴァローズ・リモルと申します。ニックネームである「K（ケイ）」と呼んでいただいても・・・十数年前のことになりますが、私は特定非営利活動法人会ミクロネシア振興協会が主催されたザビエル高校学生夏季研修事業に参加しました。あれから多くの変化を経験してきましたが、この機会に私のこれまでをご紹介させてください。

私は、太平洋に囲まれたコミュニティである、ミクロネシア連邦政府を構成する4州の一つであるチューク州サプーク村で育ちました。「どこに生まれたか（出自）」が持つ意味を自分なりに静かに受け入れ、コミュニティのメンバーとしての責任、この地（島）に生まれたことの意義（重要性）、そして教育の恩恵とそれに伴う責任を学びながら育ちました。

そこで私は、規律、奉仕、反省の精神に根ざした（ミッション・スクール）ザビエル高校に通い卒業しました。幸運にも夏季研修で日本を訪れ人々、日本という国、そして文化を知ることができました。初めての旅でお気に入りとなったこの地をその後も数多く訪れることになるとはその時に想像することはできませんでした。

ザビエル高校を卒業した時に私が手にしていたのは卒業証書だけではありませんでした。自らの夢そして家族、コミュニティの期待—私の人生を形作る卒業後の進路は故郷に恩恵をもたらすことにつながっているという期待—を背負っていました。いつか持続可能な何かをこの地に建てるためにエンジニアになるという目標、そして、実現方法が18歳の私にははっきりと見えました。最終的に「何を構築する」ことになったのかは、想像とはかなり違うものではありますが・・・

期待に応える

土木工学を専攻すると決めて目標への一步を踏み出しました。島嶼コミュニティには、道路、橋、防波堤、給水システムといったインフラ整備が急務であり現実的であると感じていました。台風等の自然災害そして経年劣化に耐えるソリューションを考案したいと思ったのです。

その後徐々に私のフォーカスは環境工学へとシフトしていきました。小さな島の開発に環境保護を切り離して考えることはできないと強く感じるようになっていました。海面上昇、限られた埋立地スベ

ース、脆弱なエコシステム—チェーンを含めミクロネシア全体が直面するこれらの現実、地球規模の課題と変わらないのです。さらに研究を進めて私が、気がついたのは、環境は単に技術的な問題ではなく、建設関連法や建築基準を施行する省庁など政治、法規制、ガバナンスといった要因が複雑に絡み合っていることでした。

そこで私は進路を再度変更することにしました。

環境関連法の研究の深化を視野に政治学へ転向。土木工学構築/管理関連法律等—政府の意思決定の仕組みや環境課題の解決に影響を与える政治力等の権力の実態を知りたいと思ったのです。

政治学は私に新しい視点をもたらしてくれました。制度、ガバナンス構造、公共政策を分析することを学ぶことで、環境保護のためには、技術的な知識に加えて、システムを機能させるためのアカウンタビリティ（説明責任）と洞察力が必要であることに気づき始めたのでした。定まったかに見えた私の進路でしたが・・・

人生には予想もしなかった運命が待ち受けているものです。

危機の時

新型コロナウイルス感染症が世界のあり様を変えた時に、大学を卒業した私を待ち受けていたのは、専門的な教育もトレーニングを受けたことのないジャーナリズムの世界への一歩でした。

それは、熟慮の結果の意思決定ではなく、感染症の危機によってもたらされたものでした。朝令暮改の感染症対策、公衆衛生ガイドラインが日々進化する中で地域社会は新型コロナについての正確な情報を必要としていました。

若いジャーナリストではありましたが、情報収集、事実確認、重圧下での明確な情報発信等々を現場で学び続けました。ニュースには重要な役割があります。稚拙な文章が誤解や混乱を招く一方、信頼できる情報発信は社会の安寧につながります。特に地球規模の危機の時には・・・

ジャーナリズムを専攻してはいませんでした。政治学を学んだことで政策立案への理解力、環境工学への長年の関心に裏打ちされたインフラや公衆衛生上の脆弱性への洞察力が私には備わっていました。

報道の世界で習得したこれらのノウハウを結局私は全く別の分野で活かすことになります。

潮目が変わる

世界規模の感染拡大が収束し始めた 2022 年、日本で実施された国際的なジャーナリスト・フェローシップ事業¹に私は環境ジャーナリストとして参加していました。この事業期間中に私は、私の人生を、固形廃棄物管理の分野へと再度向かわせる出来事に遭遇しました。

日本において廃棄物/ごみは、慎重に分別され、制度的にごみ処理/廃棄物管理システムが整備され、重要なインフラ整備の一環として地域社会ぐるみで取り組まれていました。

循環型の社会形成のために、廃棄物を資源として、エンジニアリング、ガバナンス、環境学を総動員した公共の取り組みを目の当たりにし、それまでバラバラに見えていた私の人生の道筋が一つに集約された気がしました。土地が限られ、環境政策の決定が恒久的影響をもたらすサプーク村やチューク等の島嶼国において固形廃棄物管理は単なる衛生問題ではなく死活問題なのです。

目的のある帰郷

フェローシップが終わった時、次の目標を探す必要が私にはありませんでした。固形廃棄物管理という目標に向かって一路、自然資源分野に重点を置く環境学で博士号を取得、さらに固形廃棄物管理関連ステークホルダーとのネットワーク構築を進め、同業界へ飛び込みました。

博士号での勉強を通じ、エコシステムや、持続可能なシステム、関連法規制、廃棄物インフラシステム設計についての理解を深めることができました。寄り道のように見えた数度の進路変更も実は相互に関係していたこともわかりました。初期のエンジニアリングへの関心は分析洞察力を強化し、政治学は環境ガバナンスの理解を深め、ジャーナリズムはコミュニケーション力を高めていました。無駄になったものなど何一つありません。

島嶼国コミュニティへ貢献

¹ <https://www.apic.or.jp/english/events/journalism-eng.html>

現在、私は北マリアナ諸島自治連邦区政府の固形廃棄物テクニカル・アナリスト（Solid Waste Technical Analyst）職に就いています。

島嶼国の土地は限られ、エコシステムは脆弱です。未整備の廃棄物システムは地下水、珊瑚礁、観光業、公衆衛生に悪影響を与えます。すべての意思決定は持続可能性を考慮して成されなければなりません。

私の任務は、テクニカル分析、法令遵守と制度設計です。昔私が思い描いていたエンジニアリングとは異なりますが、目的とするところは同じです。

私は今「構築」に携わっています。コンクリート製の橋梁ではありませんが - アカウンタビリティや環境保護のシステムを「構築」しています。

変わることの無い道筋

土木工学から環境エンジニアリング工学へ

政治学からジャーナリズムへ

環境ジャーナリズムフェローシップ（日本）から大学院へ

大学院から固形廃棄物管理分野へ

道筋はまっすぐではなかったかもしれませんが、島嶼国コミュニティへの貢献という目的がブレることはありませんでした。

すべての旅が予定通りに行くとは限りません。寄り道とも思える遠回り道が本来たどりつくべき場所に導いてくれるのかもしれませんが - 新しい知識を携えて。

振り返って考える時、進路変更、寄り道、予期せぬ機会すべてが、私を形作った島嶼国を守るために働いている今この時のために用意されていたのだと感じています。これまでの人生が私に教えてくれたことは目的への道は直線ではなく、成功は一つの学位や称号で定義されるのではない。重要なことはスキルや好奇心、レジリエンス(回復力)を用いて意味のある違いを生み出すことなのです。

私の経験をご紹介したことで、ミクロネシアや他の太平洋諸国の若者が自分の興味のあることを追求するために自らを信じて敢然と世界に飛び出す - たとえ真っ直ぐな道ではなくても - 勇気を持って頂

ければ幸いです。その道は島嶼国のより明るい未来の構築に貢献するために島へ戻るという選択につながっているかもしれません。